

# 書評

薬学生・薬剤師のためのコンパクト免疫学 ▶ 松井勝彦 著

薬学生・薬剤師のためのコンパクト免疫学／松井勝彦著／丸善出版2018／B5判 180ページ／3,000円＋税

免疫学を学ぼうと書籍を読み始めたものの、挫折した薬学生や薬剤師はいないであろうか。何を隠そう私もその一人である。

本書は、「できる限りコンパクト」、「ストーリー仕立てで理解可能」、「基礎と臨床がスムーズにリンク」というコンセプトで執筆されている。とはいうものの今回、書評を書くにあたり、まず本書を読破できるかが、私の一番の不安であった。ところが、免疫学の書籍でよくありがちな1ページ全面にびっしりと文章が記載されているタイプの書籍でないということを感じた。またイラストが効果的に用いられ、内容が簡潔に記載されていたことも、免疫学の書籍に挫折した者にとってとてもありがたく感じた。

本書は基礎免疫学編、臨床免疫学編に分かれて記載されている。

基礎免疫学編を読み進むうちに重苦しい思いがしてきたら、迷わずに臨床免疫学編に飛んで読むことをお勧めしたい。特に医療現場で勤務する薬剤師は日常業務において免疫関連疾患に関わることも少なくないため、臨床免疫学編から読み始めてから基礎免疫学編に移ることも挫折することなく読破する手法かもしれない。

基礎免疫学編は、免疫システムの基本構造、自然免疫、リンパ球レセプターの構造と抗原認識、リンパ球レセプターの多様性と特性、抗原提示とT細胞の活性化、リンパ球の発生と分化、T細胞を介する免疫系（細胞性免疫）、B細胞を介する免疫系（液性免疫）、抗体産生の誘導と検出、基礎免疫学編の要約の各章で構成され、イラストや図表を用いて簡潔に解説されている。また、本文中の注目すべき用語については注釈がつけられており、重要であり必ず押さえておくべき用語であることがわかるようになってい

る。

臨床免疫学編は過敏反応とアレルギー、自己免疫疾患、移植免疫、先天性免疫不全症、腫瘍免疫、ワクチン、臨床免疫学編の要約の各章で記載され、免疫疾患の発症に至る機序がわかりやすく記載されている。この中ではステロイド、免疫抑制剤、生物学的製剤、免疫チェックポイント阻害剤、分子標的薬など、免疫関連疾患では必ず理解しておくべき薬剤についてコンパクトに記載されている。また、日常業務においては日頃携わる医薬品の有効性、安全性について多く注目しがちであるが、医薬品の作用機序を体系的に理解することが可能となる。

基礎免疫学編、臨床免疫学編ともに各章の終わりには各章で解説した重要な事象やキーワード、学習ポイントのまとめと確認問題がついており、読者の理解を深め、整理がしやすいように工夫がされているのが本書の最大の特徴である。大学生の時に試験の前にテストに出る大切な部分をまとめて資料を作ることに生きがいを感じていた友人がいたが、まさにそれが「学習ポイントのまとめ」であるといえる。また、学生諸君にとって理解できているかのチェックするための「確認問題」は重要であり、もしかしらこの中から試験問題が出る可能性があり、国家試験の対策にも使えることは非常に有意義であるといえる。

私にとっては、完読できた唯一の免疫学の書籍となった。著者が「日本一わかりやすい薬系免疫学のテキスト」と記載しているのも納得がいく。読み終えた本書を我が家のテーブルに置き忘れたところ、薬剤師である妻が本書をパラパラとめくり「読みやすそうな本ね」と呟いたことが印象的であった。学生諸君のみならず、薬局、病院、製薬会社、行政など様々な分野で勤務する薬剤師に本書を是非勧めたい。

(川久保 孝 東京慈恵会医科大学附属病院薬剤部部長)